View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kansai University Repository

関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

アラカワ+ ギンズ：有機体 - 人間 - 環境プロセス．ユージン・ジェンドリン［原著］

著者	岡村 心平
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	50
ページ	381-393
発行年	2017-04-01
その他のタイトル	Arakawa and Gins: The Organism-Person-Environment Process. Eugene Gendlin
URL	http://hdl.handle.net/10112/11262

アラカワ＋ギンズ：有機体－人間－環境プロセス

ユージン・ジェンドリン［原著］

岡　村　心　平〔訳〕

Arakawa and Gins: The Organism-Person-Environment Process.

Eugene Gendlin

Translated by **Shimpei OKAMURA**

This paper is a Japanese translation of "Arakawa and Gins: The Organism-Person-Environment Process" (Genedlin, 2013). The purpose of this paper is a comparative discussion about the project of Arakawa and Gins, and of Genedlin's philosophy. First, the author pointed that Arakawa and Gins used the word "persons" as a verb, and he introduce a new concept "inging" to emphasis that function of personing. Secondly, the inging process is compared with Arakawa and Gins's concept of "landing sites," and they are discussed from the perspectives of the implicit intricacy that characterizes his philosophy and practice. Thirdly, it is shown that there is a physical and direct means of accessing the implicit intricacy that is called a "felt sense." Finally, the author introduces TAE (Thinking at the Edge), which is a practice using felt sense to facilitate creative thinking and theorizing, and is shown in these examples.

キーワード： ランディング・サイト（Landing sites）、建築する身体（Architectural body）、インギング（Inging）、フェルトセンス（Felt sense）、プロセスモデル（a Process model）

［凡例］

原文のイタリック体表記は、訳文では傍点を付加してこれを示した。また原文の二重引用符“　”は鉤括弧「　」で表現し、引用符‘　’は二重鉤括弧『　』で示した。必要な箇所には、原文を丸括弧（　）にて適宜付記した。

［本文（邦訳）］

1　世界を人間化する

アラカワ＋ギンズは、著書『建築する身体』の最初のページで以下のように述べている。「私たちが論じている有機体は、世界を人間化する」（Gins and Arakawa, 2002, p.1, 傍点は原著者）。私のつけた傍点は、この「人間化する」（“persons”）が動詞として用いられていることを強調するものである[訳注1)]。

この著書は以下のように始まる。

> 新しいテリトリーへと生まれ落ちた。そのテリトリーとは、有機体という私自身のことである。ここ以外には、どこへも行き場はない。それぞれの人間化する有機体は、新しいテリトリーが私自身であるということ、そしてこのことを見出し、調整していることに気がついている。（…）有機体ー人間ー環境は、有機体ー人間ー環境を生み出したのだ。有機体は、世界を人間化することについて語っているのである。（Gins and Arakawa, 2002, p.1）。

この「人間化すること」と身体（body）とは、同じ事物ではないが、全く別のものでもない。アラカワ＋ギンズは、通常の意味においては切り離されている３つの事物、「身体」「人間」そして「環境」から議論を始めない。彼らのいう「環境」とは、外部空間を満たしている単一化された実体から成り立つのではない。彼らのいう「有機体ー環境」は、身体の構造のことではない。すでに観察され、考察されてしまったものからは議論を始めないのである。「身体」「人間」「環境」という３つの事物は、まず区別された後で組み合わせられるのではない。彼らがハイフンをつけることによって示している、生成すること（birth*ing*）がまず初めに存在するのである。

訳注1）荒川修作とマドリン・ギンズの両者や、彼らのアート活動を指す場合には、「アラカワ＋ギンズ」という表記が定着しており、本論においてもこれを採用する。

この「インギング（*inging*）」（私が生成するプロセスと呼ぶもの）は、単に生成された出来事（*birthed* event）や内容（content）の連続のことではない[訳注2)]。このインギング・プロセスについて論じていきたい。

アラカワ＋ギンズは、身体的なものと、知覚することやイメージすること、思考すること、そして建築することのような「高次」の機能のあいだに境界が存在しないことを認めている。身体は世界と直接的に関係している。「間違いなく、世界と関係しているこの身体を研究するためのアプローチは、全く十分には展開されていないのである」（Arakawa and Gins in Govan, 1997, p.313）。

アラカワ＋ギンズの作品は、このインギングにアクセスする手段を提供する試みであり、このことによって私たちもまたインギングによって創造することができ、また彼らが実践するのと同じように、そこから語ることが可能となる。それらの新しい使用法では、言葉は新たな意味を要求してくる。このことは、言語と身体についての本質が、既存の意味やパターン、言い回しや概念によっては決して捉えられないことを示している。

進行中のプロセスは新たな組織化作用（fresh organizing）であって、あるカテゴリー内で組織化されたものではない。これこそ、アラカワ＋ギンズと私の哲学のあいだの重要な一致点である。「父親」というカテゴリーの内側においてのみ、父親というものは子どもが「いなければならない」ことになる。実在するあらゆる父親には、さらにより複雑な事情が生じているわけであって、そのようなカテゴリーの内側へと押し込まれるようなことは決してない。

もちろん、不変の（反復可能な）単位や部分というのは、テクノロジーにとっては不可欠なものである。60億の人類は、もはやテクノロジー無くしてこの惑星に住むことはできないだろう。ただし、単位や部分というものは二次的なものであり、作り出され、また作り直されるものである。これらは既存の事物ではない。これらの明示的な単位は保持されなければならないが（より正確に言えば、これらの単位も年月を経てゆっくりと変化するものであるが）、私たちはまた体験過程（experiencing）という、常に新たな複雑さ（the ever-fresh intricacy）をも認めることが可能である。私たちこそがこのインギングであり、インギングは異なった種類の秩序なのである。

訳注2）進行形“ing”にさらに“ing”を重ねたこの“inging”という用語について、本論では原語の語義を直接的に提示するために、「インギング」と音訳する。インギングという概念は、生成された内容以前の、生成するというはたらき（ing）それ自体への注目を示すものである。このインギングの特徴は、再帰性（Gendlin, 1962）やプロセス（Gendlin, 1997）や）というジェンドリン哲学の特徴を色濃く反映している。

2　インギング・プロセスとは内容（contents）を意味しない

アラカワ＋ギンズは、インギングの内実を「ランディング・サイト」と呼んでいる。

> 人間は、周囲を取り巻く環境を配置しながら…「ここ」や「そこ」や「ここよりも向こう」というものを留めることで取り組んでいく。この配置するという経過において生じてくるものは何であれ、ランディング・サイトと見なすべきである。（Gins and Arakawa, 2002, p.7, 傍点は原著者）
> あらゆるもの、何らかの兆候…（Gins and Arakawa, 2002, p.9）。

ランディング・サイトは、切り離されたユニットではない。それぞれのランディング・サイトは、複雑な、相互に重なり合った構造（inter-overlapping）を有している。しかし、これらはもともと切り離された別々のものではなく、切り離された後にのみ重なり合う。ランディング・サイトは、それらが切り離されるのに先立って「重なり合っている」のである。

> ランディング・サイトの内部は、たくさんのランディング・サイトであふれている。それが机の角であったとしても、机全体の一部として存立する時でさえ、れっきとしたランディング・サイトとして捉えられうる（Gins and Arakawa, 2002, p.9）。

ランディング・サイトの種類の１つに、イメージによるラインディング・サイトがある。「イメージのランディング・サイトは（…）そこにあるものの基準を規定する（Gins and Arakawa 2002: 13, 傍点は原著者）」[訳注3)]。イメージによるランディング・サイトは、今ここに存在している、ある種の未来である。同様に、すでに組織化された多様性も、依然としてさらなるインギングへと開かれている。

しかし、インギングとはどのような種類の秩序なのだろうか。多くのものが根源的に重なり

訳注3）引用中では（…）で中略されているが、原典では“*Imaging landing sites* are not even of an indeterminate size; they are, instead, possibly without scale. This does not mean that they have no part in recording scale. They fall in line with whatever perceptual landing sites（and dimensionalizing landing siets）*determine the measure of things to be*.”（Gins and Arakawa, 2002, p.13, イタリック体は訳者）となっており、かなり大幅に中略されている。このように中略によって原典とは文意が異なっている箇所は他の引用にも見受けられ、読解には注意が必要である。なお、本論文ではそれぞれの引用箇所はGendlinの引用の仕方に合わせ訳者が意訳している。

合っており、複雑に組織化され、また同時に開かれており、未来を規定しないまま含意されているのである。

私は哲学者であり、アーティストではないので、このような種類の秩序について問うことになる。私はアラカワ＋ギンズの言及を超えていきながら、しかしだからと言って彼らの言及に含意されていることは超えずに、このことを明確にしていく。インギングは、事物や場所に関してあらかじめ規定されているような秩序ではない。しかしまた、単純に何も規定されていないのでもない。私たちは、空虚のなかで何かをデザインしているのではない。インギングは常に再創出されるが、それは恣意的なものでも、まったく何でも良いわけでもない。私たちは、さらなる秩序化（*ordering*）のために開かれている、非常に精密な種類の秩序化なのである。身体ー環境プロセスはそれ自体を進展させる。このような秩序は、論理的関係のカテゴリー内ですでに規定されている事柄から成り立っている秩序や、既存の事物として現時点で想定されている秩序よりも、より複雑な種類の秩序である。

インギングとは、いったん切り離すことができたとしても、そのときまでは切り離すことができなかったような相互依存的な「ユニット」による多様性である。これらの相互依存的な可能性は、私たちが生きていくなかで実際に生起するものである。「それら」の可能性の多くは、それらが切り離されて存在することさえなければ、進歩していく。

このような秩序を認識することによって、新しい可能性が切り開かれる。秩序というものを個別のユニット化された要因から成り立つものと捉えてしまうと、あらゆる問題は解決できないように思えてしまい、またあらゆる状況はすでに規定されているように思えてしまうだろう。だが実際には、状況はそれらのようなユニットから構成されているのでは決してない。

しかし、実際にインギング・プロセスが最初に存在するのだとしたら、その起源は何なのだろうか？アラカワ＋ギンズはこう述べる。「間違いなく、イメージする能力は、場所化（locating）という移動し変化していく媒介に由来している…つまり、運動感覚的で触覚的なランディング・サイト、人間の身体のことである」（Gins and Arakawa, 2002, p.13）。

運動感覚的で触覚的な場所化とは、身体のことであり、視覚よりもより根源的で、かつ自分以外の何かを知覚することに先立って存在する。しかし、身体が知覚することなくランディング・サイトを有するというのはどのように可能となるのだろうか。

私の哲学では、このことは最も早い段階の種類の身体ープロセス、つまり原始的な有機体による有機的な「シンボル化（symbolizing）」として説明される。身体ー環境が１つのプロセスだとしたら、身体はどのように知覚することなく対象（「ランディング・サイト」）を有することができるのだろうか。その方法について論じていこう。

環境についてのある側面が欠如したままになっているとき、身体ー環境プロセスの全体が生じることは不可能である。ある有機体が命を落とすことなく、その生命プロセスが継続している場合、身体ー環境プロセスは、それ自体を継続するものと、継続しないものに差異化される。そこから後になって、欠如していた環境の諸側面が再来（return）すると、それまで停止していたプロセスが回復し、それを観察していた者は、有機体がどのようにその「対象」を「認識」したのか、驚くことになるだろう。

観察者は対象を知覚するが、有機体にとってその対象とは、回復した身体ー環境プロセスを「意味している」。回復したプロセスは、知覚が関与することなく「根源的にシンボル化されている」のである。

ここでの私の言葉の使い方において、この「シンボル化する」という言葉は、新たな、かつより基本的な意味を獲得している。私たち人間の身体もまた、この直接的で有機的ー環境的な仕方でシンボル化する。このようなシンボル化の仕方は知覚や表象よりもより根源的であるが、人間にとっては常に暗黙的なものでもある。私たちの「高次」の機能は、これらのこととは切り離されたものではない。というのも、そのような機能は、常に有機的なシンボル化のプロセスを含んでいるのである。そのため、私たちの知覚や認知は、それに先立って諸形式が存在するように思われる場合であっても、より多くのものを暗黙的に含んでいるのである[訳注4)]。

また、いったん形式化がなされた後であれば、それらの形式は保持されていない場合でさえ、暗黙的に機能し続ける。そしてそれらの形式は、暗黙的に機能しているあいだに、さらに発展していく。昨日考えていたことが、翌日の朝にはさらにより多くのことを含んでいるのはこのためである。

あらゆる新しい行動や認知は、身体の暗黙的な機能全体を拡張する。またその際、新しい思考や新しい言い回し、行動が、拡張された暗黙的なプロセスから次々に立ち現れうる。このような相補的な発展は、人間の歴史の至るところで起こってきたが、今や私たちはこの相補性を体系的に扱うことが可能である。暗黙的な身体の機能にアクセスすることができれば、そして、概念と暗黙的な複雑さのあいだを行き来することができれば、これらは互いを相補的に拡張させるのである。

私たちの人生や状況のある側面は、私たちが把握するのに先立って知覚されている。それら

訳注4）ジェンドリンの哲学を特徴づける用語としてたびたび用いられる“implicit”と“explicit”の訳語には、本論で採用した「暗黙的／明示的」の他に、「暗在的／明在的」、「黙示的／明示的」などがある。また同じく“experiencing”という用語の訳語にもいくつかの訳語が提案されてはいるが、定訳に近い「体験過程」を採用している。

は、意味のある、何マイルも離れたところからのメッセージから成り立っている、より豊かなものである。私たちは皆、身体とともに状況を生きている。考えることと感覚は、有機的なシンボル化を含む特別なプロセスなのである。

有機的なシンボル化に基づいて、私の哲学では、身体プロセス自体に「向かうこと（*turning*）」、そして身体プロセス自体を「所有すること（*having*）」という、２種類の身体プロセスとして、行動と認知の起源を公式化している。植物は、行為を所有する（知覚する）ことへは向かわない（*not turn*）。植物は、知覚において動物が行うようには振る舞わないのである。そして、人間は認知された「状況」のなかで「行動する」ために、さらに「振り返ること（turning）」や所有することを行うのである。

また、もう１つの重要な転換（turn）が存在する。それは、特有の暗黙的な複雑さにおいて、所有することや考えるために振り返ることである。

哲学とは常に、私たち自身の思考について捉えようと努めてきた。科学や芸術、社会、言語のようなどのようなトピックであっても、哲学は常に、そのようなトピックについて（*about*）それらがどのように到来し、また考えることができるのかに関心を持っている。実際には、何かの事物について取り組むことが哲学なのではない。哲学とは、この「～について」ということについて（about the about）取り組むことなのである。

だか、哲学は往々にして、考えるということを捉え損ねている。古代よりさまざまな間違った答えが、たびたび概念化されているように思える。つまり、考えるということ（think*ing*）はなく、その結果（product）を概念化しているのである。

しかし、もし私たちが同様にこの暗黙の複雑さによって直接的に考えることを行うならば、私たちは概念より多くのものを指すことになる。概念それ自身によって、暗黙のインギングから創出させるものを指し示すことができる。概念は、他の多くの事物にも関係しうるが、その概念自体の到来をも指し示すことができる。概念がもたらされるとき、それらの到来について、概念自身に語らせることができるのだ。概念自体が語ることは、その概念が到来するプロセスの実例となりうるのである[原注１]。

例えば、アラカワ＋ギンズは、「人間化する有機体」という言葉の使い方において、まさに人間化している（*personing*）。そう、「人間化する」とはこのこと（*this*）を指すことができる。まず「インギング」を定義するところから始める必要はない。むしろ、ここから始めていくことによって、「インギング」を定義していくことが可能となるである。その際、この「インギン

原注1）Gendlin（1997）の the “iofi principle” を参照。

グ」を単なる概念へと還元する必要はない。それどころか、古い概念を、その概念がもたらす身体的な暗黙の複雑さへと参照すること（referring）と捉えることが可能となる。

『プロセスモデル』（Gendlin, 1997）では、体験過程（experiencing）と形式化された形式（formed form）、つまり「～していること（ing）」と「～されたもの（ed）」の関係を結合することを可能にする概念的なモデルが存在する。この新しいモデルでは「～である（is）」は存在しない。あらゆる生起もまた、さらなる生起の含意である。含意（implying）は生起（occurring）のなかにある。切り離された含意というものはない。含意は、さらなる生起を含意するために、環境的な生起においてに変化する。あるいはこのように言えよう。生起は次の生起を含意するために含意を変化させる。これが、私たちが「プロセス」と呼ぶものである。これは新しい種類のモデルである。しかし、この手のより優れた別の種類のモデルは、すぐにでも現れるだろう。

哲学や理論のあいだに生じる対立（conflicting）は、暗黙的な複雑さを進展させる仕方とは異なるものである。私たちはこれらの対立を解消するようには努めない。なぜなら、私たちはこれらの対立をただ概念を通してのみで考えてはいないからである。むしろ、これらの対立によって、私たちの体験の複雑さのうちに立ち現れるその何かに期待しているのである。私たちはこれらによるあらゆる発見を保持しうる。その抽象的な結果のみが、対立を生んでいるのである。この特有の暗黙的な複雑さを明らかにし、拡張し、進展させるような方法においては、相対主義は存在しえない。また、この方法では、あらゆるモデル、理論、アプローチを使用することができる。私たちはこれらをそのまま採用することなく、むしろ、これらのモデル、理論、アプローチが、私たちの取り組んでいるこの状況という特殊な複雑さのなかに立ち現れさせる、その何かだけを採用する。それぞれのモデルは、状況の複雑さを暗黙的に豊かにし、また常にさらなる含意へとよりいっそう開かれているのである。

アラカワ＋ギンズはこのように提言する。

> 解決不可能な問題がそのままに保持され、流動性や柔軟性が保持され、その問題が生じたその場所にとどまり続けること…問題となっていることに追加情報をもたらすためにさらにいっそう開かれるということが重要である（Gins and Arakawa, 2002, p.22）。

暗黙的な複雑さについて直接的に考えていくなかで、より複雑な言い回しや概念だけでなく、状況についての暗黙的な複雑さを明らかにするような、もっと特別な行為がやってくることに気がつくだろう。いくつか簡単な手段を思いつくかもしれない。例えば、誰かに電話をかける

ことや、誰かと少しばかり関わりをもつことなどである。これらを行うことは、その問題自体の解決にはならないとしても、その問題のもっと重要な留意点を明らかにする可能性をもっている。考えるということもこれと同様である。このことを以下でさらに論じていこう。

進行中のプロセスに直接的に照合するとき、私たちは概念や言い回しに押し込められることはない。概念や言い回しは、それら自体を指しているのではない。この特有の暗黙の複雑さを指しているのである。今や私たちは、それぞれの異なった状況がもつ特有の複雑さへとアクセスする方法について論じなければならない。

3　暗黙的な複雑さへとアクセスする方法

暗黙的な複雑さはどこにあるのだろうか？暗黙的な複雑さは、身体化されている（embodied）。私たちは内側から感じられる身体のなかに、暗黙的な複雑さを見出すのである。

アラカワ＋ギンズの取り組みは、私たちにとって心地よい心的地図をかき乱すために、矛盾を具現化しているかのように誤解を受けるだろう。彼らは「矛盾の組み込まれた道筋、それ自体と矛盾している道筋（…）」（Gins and Arakawa, 2002, p.87）について言及している。しかし、彼らのアートは、かき乱すことや矛盾させることよりも、さらにより多くのことを行なっている。

アラカワ＋ギンズの建築物の目的は、私たちがこの複雑さにアクセスし、その複雑さにおける、またその複雑さからの創造が可能であるということを、私たちに発見させることである。そして彼らは、その内部へと入り、そのなかで動くときにも、私たちに身体を使うことを強要する建築物を造ることによって、この目的を達成しようとする。

> 彼女自身の指まで一本残らずすべて身体的に盛り込むこと…彼女は行く手を塞ぐものを、身を丸め、身体をくぐらせながら通り過ぎていく…障害物を避けるようにして首を曲げ、頭部はまた違った方へと曲がり、胴体は引き寄せられ、一方の脚は前方へと大股開きになって、もう一方の脚は膝をついている。（Gins and Arakawa, 2002, p.90）

私はリビングルームに座ったまま、部屋の中央に繋がっている９つの小さな仕切り窓のついたガラスのドアの方へと、自分自身が移動するのをイメージすることができる。小さな窓の格子越しに暖炉まで見えるだろう。本が傾いたまま並んでいる書棚までイメージできるのだが、一体どうやってそこまで見通せるというのだろうか。

私がただイメージしているだけのときは、私の知覚は同じままであるが、立ち上がり、わず

かに動いてみるだけでも、知覚はすべて変化する。ここから見えているあの部屋の中へ私が歩いていくことは、決してできないのである。しかし、アラカワ＋ギンズの例では、ある地点で床面と天井面の両方の見え方が一致するように構築された、３次元の部屋を建築している。彼らの創造物の内部では、どの地点へと向かうにも、複数の道筋が存在する。それぞれの道筋は、屈んだり、捻ったり、他の経路を避けながら手探りで進んだりすることを要求する。私たちが一連の身体ー環境における出来事（「ランディング・サイト」）の実際的な生起を展開させ、成立させるとき、私たち自身が環境を出来事化している（event*ing*）ということを理解する。私たちは単なる「〜である（is）」に遭遇するわけではない。私たちこそが、イングギング・プロセスなのである。

アラカワ＋ギンズによる暗黙的な複雑さへとアクセスする手段は、知覚すること、イメージすること、建築することを通じてであるが、彼らは自分たちの理論を人間のあらゆる活動へと適用する。私は話すこと、考えること、そして状況のなかで行為することについての進行中のプロセスを通じて、そこにアクセスする手段を提供する。誰かから以下のように質問されたとき（あるいは私たちが誰かにそう質問したとき）、このようなアクセスする手段を容易く見つけることができる。「今、そう言う（する）ことで何を伝えようとしているのでしょう。もっと言えますか（Can we say more?）」。最後のこの４つの単語は、暗黙的なより多くのものを、私たちに直接的に感じさせる。１つの全体的な連鎖が到来し、ある事柄が別の事柄と関連する。私たちは、どんな発言や行為のうちにも含まれている、その暗黙的な根源を見出す。「もっと言えますか」という言い回しは、ある特有の暗黙的な多様性、常により多くの事柄へとアクセスする手段に開かれているのである。

私たちはまた、身体の真ん中へと注意を向けること（*turning*）によって、多くの事物を一緒に「このこと全て（all that）」としてより直接的に接近する方法（a more direct access）を有している。ただ単に体験するということから、私たちは意図的に「この」身体的な体験過程を指し示すこと、感じること、所有することへと向かう。私たちは「これ」としての身体的な体験過程を指し示すことができるのである。それが重大なことあっても、あるいは取るに足らない些細な面であっても。

考えることと感じることも、やはり身体的なものであるが、もし私たちがすでに考え、すでに感じている何かをそのままにしておくならば、そしてもし「このこと全て」として状況全体を参照するならば、次のようなことを見出す。それぞれの状況が、異なった質感、例えば、重たい、苛立つ、こわばった、あるいは解放的な、というような――この感じを引き起こすのである。

初めのうちは、ちょうどランチやコーヒーの収まっていく身体のその真ん中あたりには、何もないように思えるかもしれない。しかし、身体に注意を向けた数秒後には、この状況についての特有の身体的な質感、「このこと全て」（私たちはこれを「フェルトセンス」と呼んでいる）が存在する。

もしその質感に触れ続けるならば、その質感は開かれる!!「あぁ、これはあのことだったんだ!!」。そしてその後、「あぁ、それはこのことがもっとぴったりだ」や「そう、まさにあのことだ！」というような、多くの小さなステップがやってくる。私たちは、身体がどのようにこの状況を生きているのかを発見し、またその発見においてさらに発展していく。身体が緩まる。今や、身体には解放感がある。たとえ発見されたことが何か困った案件についてであったとしても、それを発見したというプロセスは、身体的な解放を伴った、息を吐きながら「あぁ…」と口をつくようなものなのである。

この身体的な質感と、身体的な「あぁ…」は、行動や認知が身体的なプロセスだということを示している。身体がそれぞれの状況やそれぞれの言明をいかに生きているのか、ということへアクセスすることは可能なのである。私たちのウェブサイト（www.focusing.org）では、このアクセスのための実践を教えており、これを「フォーカシング」と呼んでいる。また２番目の実践は「TAE」（Thinking at the Edge）と呼ばれるもので、フォーカシングから新しい言い回しやカテゴリーを到来させるものである。

暗黙的な複雑さは、決して恣意的なものでもなければ、捏造されるようなものでもない。すでに形成されたユニット（already-formed units）によって可能な秩序よりも、何であっても「これ」についての暗黙的な秩序のほうが、より精密である。もしうまく表現することできないままに、フェルトセンスを伴って座っているというようなときには、いかにこのようなやり方が精密であるかに気づくことができるだろう。何かある一文を思いついては、それを退けることになる。「違う、これは私の意味することを正確に言えてはいない」というように。あなたにとってまさしく意味していることを、うまく言うことができない。ただ、なぜそうなるかと言うと、あなたにとってまさしく意味していることは、その一文が語ることよりもより精密であるからなのだ。

そしてついには、まさにそのことを言い得る一文を思いつく。しかし、私たちはそれをただの言明としては理解しない。そこにある暗黙的な複雑さを失う必要はないのである。それどころか、この言明は、この精密で暗黙的な複雑さを失わないようにするための助けとなる。進展へと至るための別のやり方は常に存在するだろう。しかし、そのうちのたった１つのやり方でも非常に有用なものであり、かつそれを把握することは非常に困難なのである。

4　捉えきれないもの

私たちは、現行の概念、知覚、解釈や言い回しの範囲内では決して捉えきれないものを必要としている。私の哲学は、身体、言語、状況の本質について考えることを可能にする新しい用語を導き出すことを試みている。言語は、定型文によるシステムでは全くない。ある特有の多様性から、全く新しい言い回しが、つまり私たちに驚きを与えるような新たなメタフォリカルな言い回しが、到来するのである。

アラカワ＋ギンズはこのような仕方で、配置すること、降り立つこと、適応すること、生産すること、あるいは開かれたまま保持しておくことについて記述している。彼らは、複雑さから直接的に記述する。彼らの言い回しにうまく馴染めなかったり、あるいは理解することさえできないかもしれないが、これまでの古い方法では、彼らの言葉を捉えることはできない。もしそれらを理解するならば、私たちはそれらの言い回しをアラカワ＋ギンズが述べることについてのインギングが実例となる方法によって理解することになる。

フェルトセンスから直接的に新しい言い回しが到来するように誘い出すこと、またそれを許容することが可能である。これらが困難なように思われるのは、こういったことが通常、現存するカテゴリーやパターンの範囲内では明確になり得ないものだからである。新たな「クレイジーな（メタフォリカルな意味での）」言い回しのみが、現存する言い回しを超えていけるのである。

新しい言い回しにおいて、言葉は新しい意味を獲得する。そこで私たちは、言葉というものが古い使い方や意味では決して捉えきれないものであることを発見する。もちろん、言葉は古い意味をもたらすが、それらの意味は新しい言い回しにおいて拡張され、変化するのである[原注2)]。

新たなメタフォリカルな言い回しはまた、新しいパターンをもたらす。新しいパターンは古いパターンの組み合わせではない。新しいパターンは、私たちがそのことを語れるようになるための発端となるのである。

例を挙げよう。TAE の授業を体験した後、ある子どもがこんな質問をした。「でも、ぼくが身体なの？（*am* I body,）それとも、ぼくが身体を持っているの？（do I *have* a body?）」。私たちはこう答えた。「なるほど、『～である（am）』という言い方でも、『～を持っている（have）』という言い方でもピッタリこないね。君と身体は２つのモノではないし、どちらか一方でもない。その疑問がどんなふうにそこにあり、どちらもぴったりと来ないことを教えてくれているちょうどそこに、とどまってみよう。そのことは、君に何か新しいことを言わせようとするよ。

原注2）Gendlin（2009）を参照。

言葉にするとちょっと奇妙に聞こえることかもしれない。どんなふうに言えるかな？」。

私たちはTAEを教えている。子どもたちはTAEが大好きである。なぜなら、TAEは子どもたち自身に、自分たちで考えることができるのだ、ということを発見させるからである。フォーカシングは、身体の内側のどのあたりで新しい考えを思いつくことができるのかということや、新しい言い回しがどのようにやってくるのかということを子どもたちに教える。TAEも同様に、新しい言い回しからどのように新しいパターンが明確になっていくのかを示すのである。専門家たちにとっては、TAEの後半のステップは、論理的に関連のある用語や、定式化された理論を導いていくものである[訳注5)]。それらは全てある特有の多様性から到来するのである。あなたにとっても「～である」と「～を持っている」のどちらでもある、まさにそこから。

暗黙的に複雑なプロセスは、次なるステップを暗に含んでいる。このプロセスは、熟慮のうえで決定されたどのようなものよりも、より高度に組織化されている。もちろん恣意的な捏造によって、この決定されたものをうやむやにしたり、排除したいわけではない。私は、ステップがまず初めに身体の含意から到来し、その後で、必要に応じてその選択肢を行使するように勧める。さらにその後でもう一度、身体に到来するものを新たに見つめてみるのである。

文献

Gendlin, Eugene T. *A Process Model*. New York: The Focusing Institute, 1997. Also available at http://www.focusing.org/process.html.

Gendlin, Eugene T. *Experiencing and the Creation of Meaning*. Chicago: Northwestern University Press, 1997.

Gendlin, Eugene T. "What First and Third Person Processes Really Are." *Journal of Consciousness Studies* 16.10–12, 2009: 332–62. Also available at http://www.focusing.org/first_and_third.

Gins, Madeline and Arakawa. *Architectural Body*. Tuscaloosa: University of Alabama Press, 2002.

Govan, Michael, Shusaku Arakawa, and Madeline Gins. *Reversible Destiny: We Have Decided Not to Die*. New York: Guggenheim Museum Publications, 1997.

参考文献

Gendlin, E.T. We can think with the implicit, as well as with fully formed concepts. In Karl Leidlmair (Ed.), *After cognitivism: A reassessment of cognitive science and philosophy*. Springer. 2009: 147–161. Also available at http://www.focusing.org/gendlin/pdf/gendlin_we_can_think_with_the_implicit.pdf

---

訳注5）TAEは14のステップによって構成された創造的思考法であり、後半のステップ10から14は理論構築のためのセクションである。このセクションでは、暗黙的に感じられたことから到来したいくつかの用語を相互に関連づけ、そこから構成される理論を、実際のフィールドでの活動に拡張し、適用するように促す。（Gendlin, 2009を参照）。